明治期における異文化受容の一例
－採菊の西洋小説の翻案の場合－

土谷桃子

要　旨

明治維新後、他の多くの西洋文明とともに西洋小説が日本に流入した。それらの小説は、純粋の翻訳小説としてではなく、江戸時代からの生き残りの戯作者たちによる翻案小説として広く大衆に受け入れられた。当時、翻案小説作者として知られていた一人に、『やまと新聞』紙上に「つゞきもの」（連載小説）を盛んに執筆していた条野採菊がいる。本稿では、彼の作品を例に取りながら、明治期における西洋小説の理解・受容の様子を考察することを目的とする。

［キーワード］

条野採菊　　西洋小説の翻案　　新聞小説　　デュマ『赤い館の騎士』『美人の勲功』

1　新聞小説家としての条野採菊

《条野採菊の略歴》

まず初めに、本稿で焦点をあてる条野採菊という人物について簡単に述べたい。

彼は天保３年(1832)、江戸に生まれた。生家は商家であったらしい。青年期に至るまでの彼の略歴はほとんど未詳であるが、文学との最初の接点としては17歳頃五世川柳に弟子入りしたことが挙げられる。彼は江戸期には「山々亭有人」という号を用いて戯作を書いているが、その号は安政３－４年(1856-57)の『春色玉襷』という作品に最も早く見られ、この後主に人情本の作者として活躍した。一方、金持ちの商人や幕府役人をパトロンとする遊興グループに属し、仲間同士で素人落語に熱中したり創作活動のヒントを与えあったりするなど、幕末の通人の一人に数えられていた。

明治維新後もしばらくは同じような遊興の日々を送っていたが、彼ら戯作者にも近代化の波は押し寄せ、採菊も７年を最後に戯作の筆を折ってい

る。その代わりに彼が活路を見いだしたのは、明治の世に新しく誕生した新聞事業であった。彼は何度か新聞発刊に携わっているが、その代表的なものとしては、4年に友人と共に創刊した『東京日日新聞』が挙げられる。これは現在『毎日新聞』としてその命脈を保っている。その他、東京府会議員などへの立候補・当選、砂糖会社の経営等、政治的・実業的な方面にも行動の幅を広げた。

彼が「条野採菊（採菊散人）」の名で文壇に復帰するのは、自らが創刊した『やまと新聞』〈1〉紙上においてであった。同紙は19年に創刊されたのだが、その創刊号から採菊は新聞小説（つゞきもの）を精力的に執筆しはじめた。7年に作家活動を離れてから表面的には文学とは没交渉だったように見受けられるのだが、この時以降の作品の量産ぶりは驚嘆に値する。彼は死の一年前まで同紙の社長を務め、その間ほとんど途切れる事なく小説等を連載している。

採菊は71歳の長寿を保ち、明治35年に没した。彼については、江戸と明治という二つの時代を生きた小説家として様々な角度から考察することができるが、今回は彼の翻案小説に注目して論を進めたい。

《新聞小説家としての評価》

採菊が創刊した『やまと新聞』にも、明治年間の翻案小説の流行ぶりを示す記事が見られる。筆者は吉田香雨〈2〉である。

> 近頃頻々出版せる人情小説なるものを買ツて読むに（略）其趣向ハ大抵西洋の焼直しイナ直訳にして日本の人情に疎く読で格別感心せず考へて別段の妙味もなし（略）新聞紙の続き物も亦然り（略）　（明20・4・27）

この記事は翻案小説に対して批判的であるが、同じ筆者による24年刊の『当世作者評判記』での採菊評は次のようになっている。

> 散人の小説は老練なり其翻訳的の味なきものを鰹魚と味淋で煮ころばして甘く人に喰わせる手際なか〳〵に感ずべし

この記述によれば、西洋小説の直訳には感心しないが、うまく日本風に書き換えたものは面白いということになる。香雨の意見を即一般的な意見とすることはできないが、採菊の翻案小説が人気を集めていたことは、作品数の多さからもうかがえる。彼が単独で『やまと新聞』紙上に連載した

小説数は、筆者が確認した範囲で40作品、そのうち15作品が翻案物である。

また、『やまと新聞』には読者から採菊作品の劇化を希望する投書が寄せられており、実際にいくつかは劇化されている。このことからも彼の新聞小説は広く知られていたと思われる。では、彼の翻案小説の執筆は何に支えられていたのだろうか。

2　採菊の翻案小説

《原作一覧》

先に述べたように、彼には西洋小説の翻案が15作品ある。『やまと新聞』紙上から判明した原作名・原作者（確認できるものは原作の成立年・原作者の生存期間も）は以下の通りである。

採菊作品名 （連載期間）	原作者名（国籍）『原作名』
折枝の梅ヶ香 (20・ 3・24～20・ 6・ 4)	アルノー（仏）　『メゼリー』
美人の勲功 (20・ 6・26～　？　)	デユマ・ペール（仏）1802-1870 『ル・シユバリエ・ド・メーゾンハージユ』 (1846)
残花憾葉桜 (　？　～21・ 5・ 3)	アドルフベロツト（仏） 『フルールドクリーム（罪の花）』
月雲両面鏡 (21・ 6・23～21・ 9・ 5)	不明（米） 『シヤード・バイ・スリー・デテクエーヴス』
迷ひの夢 (21・ 9・18～21・11・27)	ラマフヒース（仏） 『ビースパリジエンヌ（巴里風情記）』
いすかの嘴 (21・12・ 8～22・ 3・16)	不明（英）　『THE TWO DREAMERS』
元木の花 (22・ 6・11～22・ 8・ 9)	不明（英）　『ジ・パワー・オブ・ラブ』
茨の花 (22・ 8・27～22・12・ 5)	アレキサンドル・ジユマー（仏） 『ダームポリユプテー（貪婦人）』(1885)

芦の穂綿 (22・12・22～23・ 1・26)	(茨の花の続編)
金の番人 (23・ 2・ 3～23・ 5・21)	原作名・原作者不明
三人令嬢 (23・ 7・30～23・ 9・25)	＊シェークスピア（英）1564-1616 『リア王』(1607)
花の深山木 (24・ 9・23～24・11・22)	＊シェークスピア（英） 『オセロー』(1604)
妖魔石 (25・ 5・25～25・ 8・18)	ジョン・シルメン（米） 『妖魔石』
初東風 (26・ 1・ 2～　？　)	ライダア・ハガート（英）1856-1925 ＊『Jesse』
盲目の徴兵 (　？　～33・ 2・22)	原作名・原作者不明（仏）

（＊は柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』による）

《採菊の翻案小説の問題点》

採菊はこのように多くの西洋小説を翻案しているが、彼自身は外国語が全くできなかったと伝えられる。これは彼の作品を見ていく上で重要な点である。

彼が自分で原作を読めなかったということは、当然誰かが訳したものから執筆の材料を得ていたということを意味する。そうすると、まず第一に訳者（材料提供者）が原作をどの程度忠実に採菊に伝えていたかが問題になる。つまり、原作の筋と採菊の翻案の筋とが大きく異なっていた場合、その変更が採菊の意志によるものでなく、材料提供者が採菊に伝える段階でなされたものであった可能性が生じるわけである。更に同様の理由によるもう一つの問題点は、原作の選択を採菊自身ができなかったという点である。上記の表をみると、原作にはシェークスピアのような古典がある一方、『ダームポリユプテー』のように当時発表されたばかりの新作が含まれている。原作等が現在ではわからない作品も多く、これらはたまたまその時外国で流行していた小説が採菊の知るところとなり、翻案されたという状況が考えられる。

彼に西洋小説を提供した人物については未詳だが、その一人としては、『東京日々新聞』の同志で旧幕府時代から通訳として活躍し外国経験も持つ福地源一郎（桜痴）〈3〉がいる。福地は採菊のほかに、河竹黙阿弥や三遊亭円朝にも翻案物の材料を提供している。彼はジャーナリストの草分けとして知られるが、小説や歌舞伎脚本の執筆も多く、文学的にも当時は名の知られた存在だった。

以上述べたように、採菊の翻案作品には、誰かが選んだ西洋小説を誰かに訳してもらってから書くという、ひどく他人任せな側面がある。こうしたものを「採菊の」作品として扱うことに関して多少の疑問はあるが、原作をかなり正確に聞いたと思われる作品について、次節で考察してみたい。

3　デュマ『赤い館の騎士』と『美人の勲功』

《デュマ・ペール『赤い館の騎士』》

明治20年に連載された『美人の勲功（以下美人と略す）』は、アレキサンドル・デュマ・ペールの『赤い館の騎士（以下赤いと略す）』を原作としている。両者を比較対照する前に、原作者と原作について簡単に触れておきたい。

言うまでもなく、デュマ・ペール（1802-70）は『三銃士』『モンテ・クリスト伯』等の著作で有名なフランスの小説家である。彼は劇作家としてスタートするが、1840年代盛んになりつつあった新聞小説に活路を見いだし、前掲の二作品を初めとする数々の作品を発表した。『赤い』もその一つで、1845年から46年にかけて連載された。更に、彼はこの作品を翌47年に開設した自分の劇場で劇化もしている。しかし、昭和47年に至るまで日本語の完訳版がなかった〈4〉という事実から考えると、本作品の日本における知名度は決して高くないと言える。参考までに『赤い』のあらすじを紹介する。

1789年に始まったフランス革命は、共和党が勝利を収めてルイ16世が処刑され、王妃マリー・アントワネットとその子供が捕えられると一段落したかのように見えた。しかし、旧王党派の貴族の中に王妃を救出し王政を復活させようと密かに画策する人々がいた。革なめし職人に身をやつしたディメール、その妻ジュヌヴィエーヴ、モラン、そして謎の人物「赤い館

の騎士」らであった。かつて革命に参加し今は共和党軍中尉であるモオリスは、ふとしたきっかけでジュヌヴィエーヴと知り合い、彼女が主義の上での敵であることを知らずに恋に落ちる。ディメールは敵方の情報がえられることから、妻にモオリスと親しくするよう指示する。やがて王党派の王妃救出計画は失敗する。ディメールも死んだという噂を聞き、モオリスとジュヌヴィエーヴは結婚を決意する。ところがディメールは実は生きており、そのことを知って嫉妬に狂い、最後の手段としてジュヌヴィエーヴを牢に送り込んで王妃の身代わりにするという計画をたてる。しかしこれも失敗し、結局王妃は処刑される。王妃に尽くした「赤い館の騎士」は実はモランなのだが、王妃の死を知って自殺する。その後救出工作をした罪でジュヌヴィーヴが、またそれを知っていながら協力をした罪でモオリスが捕えられ、処刑されることになる。モオリスはディメールを刺し殺した後、ジュヌヴィエーヴと共に刑場にひかれ、ギロチンにかけられたのだった。

《採菊の原作理解》

採菊が、翻案するにあたって『赤い』をどう解釈していたかを知るには、連載直前の６月25日の「御披露」という記事が参考になる。

> 本編は仏国有名の著者アレキサンドル、シユマー氏の著述に係り氏が傑作中の一編にて原名ハル、シユバリエ、ド、メーゾンハージュと称せり其大意ハ仏国路易（るい）十六世の皇后マリーアンドハネツトを王党の人々相謀りて獄舎より助け出し再度仏国をして王党政治に挽回せんと為すをモーリースと称する英雄出て隠然之を助け就中ジユヌヒユービと称する佳人勤王の主義を主張し身を犠牲として皇后を救ひ参らせんとし遂に身は刑場の露と消えたる真成の人情を写し出せし小説なり（略）

この文章から彼がほぼ正確に原作を理解していたことがうかがわれる。登場人物の名前にも、原作の人物名を生かそうという工夫が見られる。

路易（るい）十六世	由非内府
皇后マリーアントハネツト	御台所鞠尾夫人
皇子ルーイス	路寿丸
皇女ユリサベツト	百合咲姫

中尉兼軍法会局理事モーリース　　陸軍調役評定所留役母里伊豆
勤王主唱の佳人ジュスユービ　　優美

更に両者を対照して読んでみると、逐語訳とも言える部分があることに気が付く。特に顕著なものをいくつか挙げてみる（尚『赤い』の訳は鈴木豊訳〈2〉によった）。

- （赤い）「で、床からなにか拾わなかったかな？」「うちの娘がですかね？」「そうじゃないよ、マリーアントワネットの娘がさ」
- （美人）「シテ見れバ彼れハ何所ぞで拾ひでも致したか　「妾の娘の事でござい升か　「否々百合咲の事である
- （赤い）「ぼくがお宅へ伺うのはですね、ディメール、あなたやあなたの奥さまにお会いしたいからで、べつに市民モランに会いたくて出かけ　るわけではありませんからね」
- （美人）「なれども拙者が君の所へ参るハ君と細君に御目に掛うと存ずるばかり陽に向つてハ別に用事はない

こうした所からも、採菊がかなり正確な原作の提供を受けていたと考えられる。採菊の翻案小説には材料提供者という第三者が介在しているため注意を要することは先に述べたが、『美人』に現れた翻案は採菊自身の意志によるものである可能性が高い。よってこの作品を手掛かりに、彼の翻案の態度を探ってみることにする。

《『美人の勲功』に見られる内容の変更》

デュマ・ペールの小説は、フランス革命を題材にしているものが多いため、明治期の自由民権思想と結び付きやすく、政治小説として翻訳・翻案されているものが目立つ。しかし、採菊の場合はそうではなく、明治維新をその舞台としている。彼は『美人』執筆時56歳であり、新しい思想を用いて翻案するより自分が経験したことを思い出しながら書くほうが書きやすかったのだろう。

『赤い』と『美人』の最も大きな違いは、登場人物の設定である。原作では実は同一人物であったとされるモランと「赤い館の騎士」が、翻案ではそれぞれ陽蘭平・堀江留蔵の別人となっているのである。『赤い』の読み所の一つは、無口で引っ込み思案、しかも小柄で分厚い眼鏡をかけていてまるで風采の上がらないモランと、王妃のためなら命さえ投げうつ位の

勇敢で大胆な行動に出る「騎士」とが、実は同一人物であったという意外性にある。なぜ採菊はこの趣向を無視したのだろうか。

陽と堀江の周辺を見ることがその疑問を解くヒントになる。原作でのモランはモオリスにとってはジュヌヴィエーヴをめぐる恋敵であるが、翻案でその役を担うのは陽である。但し、陽は醜男のモランと違い、二枚目に描かれている。更に、彼に恋心を抱く国見という女性を早い段階（連載14回）から出して、いずれはこの二人が結ばれることを読者に予想させる。一方、堀江は原作には全くない優美の兄という役所である。彼が物語に登場するのは、優美に結婚を促す、母里伊豆と喧嘩した優美に仲直りの手紙を書くよう諭すなど、妹の行動に干渉する場面が多い。自らの行動を自分自身の判断で決める原作のジュヌヴィエーヴが、兄の指示を仰いでいる翻案の優美に変えられていることは、当時どのような女性が理想とされていたかを示しているのではないだろうか。

残念ながら、『やまと新聞』の該当号が欠号のため『美人』を結末まで読むことができない。『赤い』はあらすじからもわかるように、悲劇的な結末を迎える。江戸期に大団円の草双紙を数多く書いていた採菊が、翻案でどういう結末をつけたのか興味を引かれる。後になると次節で述べるような悲劇的な作品も書いているのだが、翻案作品としては僅か二作目のこの作品ではどうだろうか。『赤い』では主人公たちが時代と逆行する王党派に与してしまったため死という結果を招くのだが、『美人』の主人公らはやがて勝利を収める倒幕勤皇派に属している。また、登場人物の男性それぞれには似合いの女性が配置されている。現存の部分を読む限りでは、『美人』に悲劇の結末を予想させるものはない。

4　シェークスピア『オセロー』と『花の深山木』

もう一つ『花の深山木』を例に挙げて論じたい。これは『オセロー』を翻案したもので、明治24年に連載された。材料提供者についてはやはり未詳であるが、この作品に関しては、彼の理解は表層的なものに止まっているという印象を受ける。『オセロー』の白人女性が黒人男性に恋するというところにだけ興味が集中しており、それを「（略）恰も花に深山木の如き美人醜男を恋ひ為めに一条の葛藤を惹起すといふ最面白き脚史」（明24・6・18）というように美人と醜男になぞらえている。事実、『花の深山木』

の主人公は背は低く色は黒く、その上顔面一帯に疱瘡の跡が残っているという、少々あくどいくらいの描かれ方をしている。また連載全49回のうち、二人が結婚にたどり着くまでの部分に27回も費やしており、ここからも採菊の『オセロー』に対する興味の持ち方の偏りがうかがえよう。

しかし、この作品の結末は、夫に疑われた女性が自殺し、夫も死ぬという悲劇になっている。かつては勧善懲悪の草双紙に筆をふるった採菊がこのような結末を書いているのに注目したい。もちろんこれは彼個人の問題だけでなく、人々の小説の受け入れ方が変化したということもその原因の一つかもしれない。こうした点については未調査であり、今後は採菊個人の調査にこだわらずより大きな視野に立って考えてみたいと思っている。

5　まとめ

小説家条野採菊は、現在での知名度は低く、その作品についても詳しい研究はほとんどされていない。それは、彼の作品が文学的には研究対象になり得ないと判断されるからであろう。しかし、彼が明治20年代新聞小説の第一線にいたという事実は認められていい。

今回は二作品だけを紹介したが、彼の翻案小説全体を通じて感じられるのは、西洋小説を非常に自由に日本化しているということである。恐らく当時の読者は、知らされなければそれが翻案であることに気付かないまま読んでいたのではないだろうか。筆者自身実際読んでみて、原作を知らないものに関しては、とても翻案とは見抜けなかった。これは彼自身が原作を読まなかった（読めなかった）ために、反って自由に翻案できたということである。しかしこれは言い換えれば、彼が面白いあるいは読者に受けそうだと思ったところだけを借用していた、もっと言えば都合のいいところだけをうまく抜き出していたとも言えるのである。江戸時代末期、彼は遊興グループに属しその仲間から草双紙の題材やヒントを得る戯作者だった。それと同じ態度が、明治の西洋小説に対してもあったのではないだろうか。

西洋小説という時代の先端をいくものを題材にしていながら、彼の作品は本質的には以前と変わりなかった。以前と変わらなかったという点では、彼の作品を楽しんでいた読者の側も同じである。両者ともたまたま江戸から明治という時期に生きていたため、小説を含む西洋文化の流入に接した

のである。先に述べたように、採菊の翻案小説には西洋文化（文学）に対する正確な理解があるとは言えない。しかしその作品を読むことによって、読者は異文化を異文化として意識しないままに接することができたのである。

以上、彼の翻案小説には、原作の気配を感じさせないほどの日本化を施されていたと同時に、そのことによって一般庶民階級における西洋文化の受容に一役買っていたという、一見相反するような両面があるということを本論のまとめとしたいと思う。

注〈1〉資料として用いた『やまと新聞』は東京大学法学部付属明治大正新聞雑誌文庫所蔵の原本及びマイクロフィルム。

〈2〉この人物については詳細不明。のち『やまと新聞』に数回投書が見られ、恐らく採菊を知る人物と思われる。

〈3〉例えば『やまと新聞』（明33・5・4）に「紙上より引続き掲載されし盲目の徴兵と云へる小説（これは仏国の小説にて桜痴居士が採菊翁へ口授されしものとか聞く）」とある。また、円朝の『名人くらべ』の原作（サルドゥ作『ラ・トスカ』）、黙阿弥の『人間万事金世中』の原作（リットン作『銭』）等も桜痴の提供である。

〈4〉鈴木豊訳『赤い館の騎士』（角川書店　昭47）解説より。

参考資料　吉田香雨『当世作者評判記』　大華堂　明24
柳田泉　『明治初期翻訳文学の研究』　春秋社　昭36
鈴木豊訳『赤い館の騎士』　角川書店　昭47

（お茶大教務補佐・国際日本語普及協会）